

呉鎮守府の少し変わってる娘たち

A・Dson

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

セイレーンとの戦いのさなか「アズールレーン」と「レッドアクション」に分裂してしまった艦船たちとその指揮官。

しかし、重桜領は広島、呉鎮守府にはその勢力を問わず多くの（一癖ある）艦船少女たちが所属している。

これはそんな鎮守府の指揮官を務める青年（または艦船）がつづる日誌である。

艦船たちの設定については私が執筆している「不幸な憲兵が提督に!？」の設定を流用しています。

あくまでもそちらがメインなのでいつ投稿するのか、どんな感じで進んでいくのかもきちんと決まっていないう見切り発車感満載ですが、楽しんでいただけたらと思います。

キャラ崩壊注意でございますのでよろしく願います。

目次

1日目	呉鎮守府は今日も平和です。	1
2日目	母性↓過保護?↓束縛!?	4
3日目	猪突猛進な剣士↓なんかすごい剣士(小並感)	7

1日目 呉鎮守府は今日も平和です。

くくくく 呉鎮守府勤務日誌くくく

鏡面海域の攻略に成功した我々呉鎮守府の仲間たち。

作戦の成功後、あわただしかった鎮守府勤務も落ち着き手持ち無沙汰になったのでこの鎮守府について日誌を書こうと思った次第である。題名には鎮守府勤務日誌と大仰に書いてはいるがなんてことは無い日常風景をつづるつもりだ。(ただ単純に良い題名が思いつかなかっただけとは言えんな)

とはいえいざ書こうとなるとなかなか思いつかないものだな・・・
そうだな・・・まずはこの鎮守府の過去を簡単に振り返るとしようか。

思えば、この鎮守府の指揮官になってから過去を振り返る機会なんてなかったな・・・

昔はただひたすらにがむしゃらに、前だけを見て進んできた。そのおかげか、仲間たちも増え、誰も沈むことなく、戦況も今では落ち着いている。

・・・いきなりアズールレーンの艦船が建造されるとは思ってもみなかったが。

最初こそ気まずかったが、彼女と話すうちに少しずつ打ち解けていくことができた。これも彼女が持つ母性ゆえだろうか？

しかし数日後に来たグレイゴーストをみた時は正直死ぬかと思っただ。というかここ重桜なんだがどうなっているのか当初は疑問に思っただ。

・・・今ではもう周りも自分もあきらめているが。

その後も、重桜、レッドアクシズ、ユニオンなど様々な所属の艦船が建造された。

当時は疑問に思い上にも話したのだが、なぜか解答が来ないまま意見具申自体が無いことにされていた。未だに疑問である。

とまあ、こんな感じでこの鎮守府には両陣営の艦船たちが所属している。よく内輪もめが起きないなど不思議に思うがこれもまた皆の

相互理解のたまものだろう。

時々物理に走るのはまあ・・・大怪我にならなければ多少は目をつぶろう。

そう言えば最近、互いに勝ちたいからかはわからないが格闘技やスポーツに手を出す娘たちが増えてきたように思える。

いや、演習でやればいいじゃんと言ったのだが、燃料がもつたいないからだそうだ。

・・・正直それならコイントスとかでよくね？どこぞの某旅団みたいにさ。

最も、それを思いついた時にはすでにリングやコートなどが（自分に無許可で）できており各自スポーツで競い合っているうえにトトカルチョまで行われている始末。胴元が明石だったのでしばらく店に顔を出さなかったら泣きついてきたので許した。儲けは没収したが。

とりあえず、格闘技、特にプロレス系に手を出している娘たちには技に気を付けてほしいと思う。怪我もそうだが、その・・・下着とかが見えてしまうのである。（汗）

注意してほしい最たる例が軽巡洋艦クリーブランドである。自ら海上の騎士と呼び男勝りな彼女だが、テレビで情報を得たのか、デス○イーノを切り札にしているのである。

わかる人ならわかるがああ技は相手の腕を支えにして一回転するものである。

つまりその・・・わかるだろ？見えてしまうのだ。

最初見たとき驚き注意したのだが全くに意に介してくれなくてへこんだ覚えがある。

後は、そうだな・・・ジャベリンと綾波のテニスだけは二度とやらせたくない。

○塚ゾーンとか、波○球とかもうあれはテニスではなくテニスだった。

まあ試合後は基本的に後腐れなく終わっているし、本人たちも気に入ってるから良しとしよう。

こうして考えながら書いていると時間の流れが速いように感じる
な、そろそろ夕食の時間だ。今日はカレーらしい。楽しみだ。

今日はここまでにしよう。H a s t a m a n a n a .

二日目 母性↓過保護?↓束縛!?

今日は、というか、これからはこの鎮守府にいる皆について書いていこうと思う。

いずれ戦いが終わった時にでもこれを見て話の種にでもしたいものだ。

さて、誰から書いたものか・・・そうだな、今日はリアスについて書くでしょう。

リアス・・・正しくはイラストリアス。イギリス海軍イラストリアス級一番艦。私の鎮守府での最初の建造艦である。

建造当初はそれは焦った。当時この鎮守府にいたのは初期艦の綾波だけだったからだ。練度の差こそあったが相手は空母。まともに戦われたら勝ち目はなかった。

あちらから対話に入ってくれたのは僥倖以外の何物でもないだろう。

幸いにも、話し合いも順調に進み（リアスがこちらに譲歩してくれたのが何より大きかった）無事彼女はこの鎮守府の一員になった。た。

以降、建造されたアズールレーン側の艦娘達の説得を彼女が担ってくれた。おかげでここまで大きな問題も無く彼女たちを艦隊として運営することができた。違う陣営にいるのにもかかわらず献身的に協力してくれる彼女に私が好意を抱いたのは決して間違いではないはずだ。多少の葛藤こそあったが私は彼女に最初の指輪を渡した。（最初と書いた時点で現状は察してほしい。）その時の彼女の表情は今でも忘れられない。彼女は指輪を受け取ってくれた。

しかし、それ以降、彼女の性格が少し変わったように私は感じている。

以前、というより彼女はもともと母性の強い女性だ。艦隊の皆に慈愛を向け皆を慈しむ彼女、その姿に私は惚れたのだ。

しかし、私とケツコンしてからは、艦隊の皆への態度は変わらないが、私に対しては若干過保護ともいえる部分が見え隠れするように

なった。最初の方は新妻のいじらしいやきもち程度としか考えていなかったが、ある日、私は考えが甘かったということを知ることになった。

彼女との夕食の後、意識を失った俺は目が覚めると、私は四肢をつながれ、ベッドに拘束されていた。そして目の前には濁った瞳で私を見つめるリアス。その視線を見て私は己の考えの甘さを思い知った。以前なら甘い雰囲気を感じた言葉も今の彼女が言うのと、仄暗い水底に引きずり込まれるかのようだった。

「指揮官さま、どこに行かれようと、イラストリアスはずっとそばにいますわ。」

いや、この状態じゃどこにも行けないんだが、と言いたかったがそんな雰囲気ではなかった。

この後、必死の交渉の末に私は解放された。動けないのは身体的、精神的にもよくないことを話すと彼女は四肢をつないでいた鎖のようなものを外した（どうやら明石が一枚かんでいたらしくリアスの命令でひとりでに外れた。ファン〇ルの何かなのか？）

他にも、たまに外に出ないとだめとか動揺もあってかいろいろあることないこと言った気がするが、基本的に彼女は真摯に聞いてくれた。そのうえで彼女は俺にとって必要ないと（彼女自身が）考えられるものを切り捨てて行った。私はこんな場面でも彼女が俺のことを大切にしてくれていることを痛感した。それを理解したとき、迷わず彼女を抱きしめた。（保身の心が無いと言えば嘘になるが、それでもこの気持ち自体に嘘はない。）

彼女は目を見開き、その後、涙を流して私を抱き返した。

その後どうなったかだが・・・

彼女は、今日も艦隊の皆に光と慈愛を、そして私には今でもほんの少しではあるが過保護な一面をのぞかせている。拘束された時は正直に言えば怖かったがきちんと彼女に向き合わなかった自分の自業自得なので気にはしていない。リアス自身もそれはわかってきているはずだし現にリアスの様子は変わっていない。ただ、彼女自身負の感情をため込みやすい性格だからそれが爆発しない様にケアをす

る必要があるだろう。

彼女の、リアスの夫なのだから。彼女に尽くし、尽くされる。それがリアスのためになるのならなんだってできる・・・というわけではないが、出来る限り彼女のためになりたいし、それが二人の幸せにつながると思じている。指輪自体はもう二人ほどにも渡しているが、リアス自身はこの事をささいなことだと言っている。正妻という立場の余裕なのだろうか？それとも・・・。さすがにそれはないと思うが・・・。無いよな・・・(汗)二人とも、そういうった空気を読むという点に関しては悪い意味で一級品なところがあるから大丈夫だとは思うが・・・。

以前からそういうところがあつたが、今でも戦闘狂的な部分が抜けてきつてないのが玉にキズか。ある日突然いなくなつたと思つたら、敵勢力に突撃してたなんてこともあつたな・・・。

おっと、もうこんな時間か。気づけば夜だな・・・

彼女に出会つて今も、昔も、変わらないこともあるんだなつてことに気づいた。そんな一日だつたな。

じゃあ、また明日。

三日目 猪突猛進な剣士↓なんかすごい剣士（小並感）

さて、三日目だが、最近また新しい艦娘も増えてきて寮舎も手狭になつてきたな。

今度また増築しなければな。

今日は誰について書いたものか・・・そうだな、先日の愚痴も踏まえて高雄について書くことにしよう。

高雄・・・高雄型重巡洋艦の1番艦。根っからの武人氣質で戦闘時にはその実力をいかんなく発揮する。ここまではいいんだがなあ・・・確かに彼女は戦闘時においての実力はすごいのだが、突撃癖があるうえに戦闘時以外がものすごくポンコツなのである。

この前明石の発明で異世界に送られた時もはぐれた上に一人さまよつてたらしい。

私生活もまあひどいというわけではないがなんというか・・・必要最低限の事しかしていなかったのを覚えている。

そして何よりも時々味方と敵を見間違えて切りかかることがある。お前はどこの人切りだ。

そんな彼女だが、最近はどこことなく普段の私生活になんとか華が見えるようになってきたのと、何より味方を誤認するケースが減つたのだ。

きつかけは何なのかはよくわからないが恐らく指輪を渡してからだろうか。（きちんとリアスに話は通した。）個人的には戦力強化となんとか放つて置けなかったとかまあいろいろあったのだ。渡したときの表情はリアスとはまた違う意味で新鮮だった。（まさに茹蛸という言葉がふさわしかった。）

それ以降からか。今の彼女はなんというか人間らしくなつたと思う。前は（戦闘時を除き）必要とされていることだけを必要とされる分しかやっていなかった。言い換えれば一種のロボットのようだった。それが今では他者と交流し、いろんな服を着たり様々な遊びをし

たりと人並みの生活を送れていると思う。鍛錬にも一層熱が入っているようで何よりだ。

ただ、どこぞの農民よろしく全く同時に三つの斬撃を放つあれまで習得したのだけは予想外です。現在は某悪魔すら泣き出す兄貴の技の習得を目指しているそう。いつか別次元の領域に足を踏み入れそう。だ（小並感）

さて、今日はこんなところか。指輪を渡しているのから書いているから次はアイズについて書くか。

くくく指揮官が日記を書いている頃くくく

「高雄さんちよつとよろしいですか？」

「ああ、構わないが。」

少し場所を変えて。

「高雄さん、最近指揮官様に近すぎではありませんか？」

「つ、そ、そんなことは無いぞ！」

「嘘ですね。いつも指揮官様を見てる私に嘘が通じるとは思わないことですね。」

「いつも・・・？まさか、艦載機を使って監視しているのか!？」

「ええ。主にあなたみたいに指揮官様に近づく輩を見つけるためですけどね。因みに今のあなたは艦載機で包囲してますから。ニガシマセンヨ？」

「・・・なるほど。それが分かれば十分だ。」

抜刀、そして納刀。直後、小規模の爆発が同時にいくつも起こった。「!?何を・・・どうして・・・?」

「この高雄、甘く見られたものだ。しかもここで撃ったら貴様もき添えを喰らうぞ?」

イラストリアスと高雄の距離はおおよそ50cm。確実に巻き込まれる。

「・・・／／／／／」

「はあ、やりすぎると指揮官に嫌われるぞ?」

「!?そ、それだけは・・・」

「ならやめるんだな。」

「は、はい・・・」シューーン

落ち込みながらイラストリアスはその場を後にした。

「あ、危なかった・・・／＼／＼」

高雄自身も顔を真っ赤にしながら歩き始める。

(指揮官のことを考えたりすると顔が真っ赤になってしまいそうになるからな・・・)

今日も呉鎮守府は平和(?)です。